

# 小学校音楽科における 「音楽を形づくっている要素」の指導法

— 視覚的教材の分析を通して —

Teaching Method of “Elements of Music”  
at Elementary School Music Education.

— Through the Analysis of the Materials to Visualize Music —

丸 林 実千代  
MARUBAYASHI Michiyo

[Abstract] Eight years have passed since the release of the current version of the “Education Ministry’s Curriculum Guidelines for Elementary School”, and revision for the next update is ongoing. The main revised point in the current “Music Section of Education Ministry’s Curriculum Guidelines for Elementary School” was the formation of a “Common Curriculum for Performance and Listening” and the inclusion of “the elements of music” in the Common Curriculum.

Since the Common Curriculum and the elements of music were introduced, many attempts to teach them have been carried out in elementary school classrooms, and the feedback accumulated through teachers’ study groups and brush-up sessions, and reflected in individual teacher’s “Teaching Plan”. However, this feedback is from an individual teacher’s experience, and still no framework exists to collect, analyze or clarify the overall experience of teachers as a whole. In the current situation teachers are given insufficient information and they have to plan and teach the class relying solely on their own experience, so they are unable to conceptualize “the elements of music” objectively. Therefore, structuring the teaching methods of “the elements of music” or establishing a framework is necessary.

Also, alongside learning the elements of music, more materials to visualize music are being used in recent years. This paper focuses on the materials to visualize music and reviews the relationship between those materials and the teaching of “the elements of music” in elementary school classrooms, aiming to be a fundamental study for establishing these teaching structures.

The research methods cover “music textbooks” and “teacher guidance books”, in which the materials to visualize music are analyzed in terms of ‘illustration’, ‘photograph’, ‘graphic score’, ‘rhythmic notation’, ‘melody line’ and ‘coloring’. Thus the tendency of each grade is revealed. Next each element of “elements of music” is analyzed by those same terms, and tendencies and challenges are revealed. Using these tendencies and challenges, we intend to establish a framework for understanding the teaching methods of “elements of music” at elementary school music education in the future.

## 1. はじめに

現行の『小学校学習指導要領』が告示されてから8年が経過し、すでに次期の改訂に向けての作業が進められている。現行の『小学校学習指導要領・音楽』の改訂の最大のポイントは[共通事項]の新設と、その中での「音楽を形づくっている要素」の提示であるといえよう。

これらが示された後、小学校の実践現場では数多くの試みがなされており、それらは研究会や研修会の「学習指導案」レベルで豊富な蓄積を重ねてきている<sup>1)</sup>。しかし、それらは個別に取り組まれた音楽教育実践であり、多くの実践を総括して捉え、分析のできる枠組みはいまだ開発されていないといえよう。このような状況で、音楽教師は希薄な情報と自己の指導経験のみを主要な拠りどころとして音楽授業を計画・実践せざるを得ない。そして、「音楽を形づくっている要素」に関する指導について、客観的に把握・判断することができないのが実状であろう。つまり、何を指標として学習を計画するのも不明瞭であり、そして実践された授業を分析・検討し次への課題を見いだすといった、一連の授業研究が有意義に機能することができていないのである。そこで求められているのが、この「音楽を形づくっている要素」の指導の構造化、もしくは枠組みの構築である。

また、この「音楽を形づくっている要素」の学習とともに、近年では音楽を視覚的に把握させる教材が多用されているようである(以下、これらを「視覚的教材」と表記して用いる)。現在の『音楽教科書』は多くのイラストや写真で彩られ、それらが子どもたちの音楽学習を促進させていることは容易に想像できる。そして、上記の注1)で参照した国立教育政策センターのサイトの「音楽を形作っている要素」に関する実践では、この要素を視覚的に表現した教材が多く用いられていた。つまり、「音楽を形づくっている要素」に関する指導では、教師の実践経験から視覚的教材が効果的と考えられていることが推察される。しかし、これらの関連性は具体的かつ詳細に検討されたことがないのではなからうか。

そこで本論文では、視覚的教材に焦点をあて、現在の小学校音楽科の授業における「音楽を形づくっている要素」の指導との関連性について分析・検討することを目的とする。そして、ここから「音楽を形づくっている要素」に関する音楽指導を構造化するための基礎研究としたい。

## 2. 分析の方法

(1)「音楽を形づくっている要素」とは

平成20(2008)年告示『小学校学習指導要領・音楽』に示された「音楽を形づくっている要素」とは右の【表1】のとおりである。「音楽を形づくっている要素」とは、[共通事項]に示されたものであり、それは各学年とも「音楽を特徴づけている要素」と、「音楽の仕組み」に大別されている。

【表1】「音楽を形づくっている要素」

第1学年 及び 第2学年	音楽を特徴づけている要素： 音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れ、フレーズ 音楽の仕組み：反復、問いと答え
第3学年 及び 第4学年	音楽を特徴づけている要素： 音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なり、音階、調、拍の流れ、フレーズ 音楽の仕組み：反復、問いと答え、変化
第5学年 及び 第6学年	音楽を特徴づけている要素： 音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なり、和声の響き、音階、調、拍の流れ、フレーズ 音楽の仕組み：反復、問いと答え、変化、音楽の縦と横の関係

## (2) 分析対象

分析対象は小学校音楽科において最も多く採択されている教育芸術社の『小学生の音楽 教科書1～6年』(以下『教科書』)、および『小学生の音楽 教師用指導書1～6年』(以下『指導書』)(ともに2011年)である。当然のことながらこれらは平成20年告示『学習指導要領』準拠である。

そして、これらに掲載・表記された視覚的教材を対象とするが、『指導書』の中の指導法においてDVDを用いていたとしても、各教師が用いる映像を特定できないため、今回の分析では対象としない。

## (3) 分析方法

本論文は【表2】のような分析枠組みを構成した。この枠組みにしたがって、『教科書』および『指導書』を分析し、全学年について分析結果を記入していく。

【表2】分析枠組み

題材名	教材名	題材のねらい	音楽を形づくっている要素	視覚的教材の種類	音楽を形づくっている要素と視覚的教材との関連性	指導書における教材の活用法	考察
-----	-----	--------	--------------	----------	-------------------------	---------------	----

〔題材名〕は、『指導書』に掲載されているもの。

〔教材名〕は、その題材で用いられている教材名(=ほとんどが楽曲名)。

〔題材のねらい〕は、『指導書』に題材ごと提示されているもの。その文章の中にも「音楽を形づくっている要素」が含まれている場合は、それらを抽出する。

〔音楽を形づくっている要素〕は、『指導書』の中に年間指導計画の形態で、「教材と学習指導要領との関連」が示されている。そこに教材ごとに「リズム」や「音色」などの具体的な要素が表記されており、それらを分析表に記入する。また、要素が記入されていない教材については、『指導書』の「指導計画」(=学習指導案)のページを詳細に検討し、そこから要素を抽出する。

〔視覚的教材の種類〕は、筆者が『教科書』を事前分析した結果、〈挿絵〉〈写真〉〈絵譜〉〈リズム譜〉〈旋律線〉〈色分け〉の6種類に分類できると判断した。そこでこれら6種類の中から判別する。

〔音楽を形づくっている要素と視覚的教材の関連性〕は、『指導書』の中で視覚的教材をどのように活用しているのかを読み取り、それらが「音楽を形づくっている要素」と関連しているかを筆者が検討する。そして関連性の有無について○×で記入する。なお部分的に関連はしているが、確実と判断できないものは△とする。

〔指導書における教材の活用法〕は、『指導書』の「指導計画」において視覚的教材が用いられている活動を抜粋する。

〔考察〕は、分析からの筆者の考察を記入する。

### 3. 各学年の分析結果および考察

【表2】の形式にしたがって、全6学年の『教科書』と『指導書』の分析を行った。その分析表は大部にわたるため、ここでは省略する。

『教科書』および『指導書』における視覚的教材の種類ごとの分析結果は、下記の【表3】のとおりである。

【表3】『教科書』に見られる視覚的教材の種類と数 (教材数)

	挿絵	写真	絵譜	リズム譜	旋律線	色分け	学年計
第1学年	26	6	6	9	0	6	53
第2学年	25	5	6	6	0	2	44
第3学年	15	10	3	4	0	1	33
第4学年	10	7	6	5	1	1	30
第5学年	6	9	0	2	2	1	20
第6学年	7	10	0	2	1	0	20
項目計	89	47	21	28	4	11	—

(1つの教材に複数の種類が含まれている場合もあり、それらも重複してカウントした。)

そして、「音楽を形づくっている要素」と視覚的教材の関連性を検討した結果は、【表4-1】【表4-2】【表4-3】である。

では、以下に分析結果を学年ごとに述べ、その特徴について考察を加えることにする。

#### (1) 第1学年

第1学年の『教科書』では、すべてのページで視覚的教材として〈挿絵〉〈写真〉〈絵譜〉〈リズム譜〉〈色分け〉の5種類のいずれかが用いられていた。

その中で最も多かったのは〈挿絵〉であり、合計26点の教材に見られた。そして〈挿絵〉を用いたほとんどの教材やその指導法では、「音楽を形づくっている要素」との関連は見られなかった。しかし、第1学年の子どもたちには、まず音楽に興味・関心を抱き、音楽に親しむことが重要であると目標にも示されているように、『教科書』の〈挿絵〉によって音楽活動に興味を持つことに有効に用いられていると考えられた。指導書の学習内容の部分では、〈挿絵〉を見て楽しい様子を思い浮かべながら歌ったり、登場人物の気持ちになって聴いたりするなど、音楽を身近に感じることができるような学習が展開されていた。これは〈写真〉についても同様である。〈写真〉は情景を想像するために多用されており、ここには「音楽を形づくっている要素」との関連は見られない。この〈挿絵〉と〈写真〉は、第1学年の子どもたちが音楽学習を進めるうえで、補助的な位置づけにされているといえよう。

次に〈絵譜〉であるが、第1学年の学習内容には実際の音符・休符が設定されていないため、『教科書』にも五線譜が用いられていない。そのため、歌唱教材の多くは白抜き音符で表されている。白抜き音符は階名唱を行う活動には有効であり、中学年以降に増加する読譜・記譜の活動へと段階的につなげていくことができると考えられる。

そして〈挿絵〉の次に多かったのは〈リズム譜〉である。〈リズム譜〉は、「しろくまのジェンカ」や「ぶんぶんぶん」など、〈挿絵〉と合わせて学習を進めるものに多用されており、子どもたちが

無理なくリズム打ちや拍打ちを習得できるよう工夫されている。さらに〈リズム譜〉におけるリズムは、四分音符や四分休符などの音符・休符で表されるのではなく、「○(たん)」や「・(うん)」、「○(たた)」などの形で簡単に表記されている。このことから、第1学年の時点では、拍や音符について詳しく説明し理解させるのではなく、「拍の流れ」にのって確実にリズム打ちができるようにする工夫がなされているのである。そしてその際、最初から打楽器を用いてリズム打ちをするのではなく、まずは手拍子やリズム唱を行い、その活動からリズムを体で感じ取れる活動に移行するようにされていた。〈リズム譜〉に関しては、「音楽を形づくっている要素」のうち「リズム」や「拍の流れ」の要素との関連が強いといえよう。

さらに〈色分け〉では、交互唱をする際に有効的に用いられている。〈色分け〉されていることで、子どもたちはどの部分が交互唱になっているのか、自分のパートの位置づけを視覚的に理解することができる。〈色分け〉された教材例として「あいあい」があげられるが、この学習では互いの声を聴きながら楽しく歌う活動となっている。この〈色分け〉は、「音楽を形づくっている要素」のうち「反復」や「旋律」の要素との関係が強く見られた。

## (2) 第2学年

第2学年の『教科書』では、第1学年同様、すべてのページで視覚的教材として〈挿絵〉〈写真〉〈絵譜〉〈リズム譜〉〈色分け〉の5種類のいずれかが用いられていた。またその数の内訳もほぼ同じであった。

まず〈挿絵〉に関しては、第1学年同様、そこから情景を想像させるための補助的要素が大きい。情景の想像以外には、「たぬきのたいこ」や「はしの上で」などにおける身振り例を示した〈挿絵〉が増えている。子どもたちが音楽を聴きながら、もしくは歌いながら「拍の流れ」にのって楽しく活動することができるような内容が、この第2学年では多い。また、〈挿絵〉と比較して〈写真〉

【表4-1】「音楽を形づくっている要素」と視覚的教材の関連性(低学年)

視覚的教材		第1学年						第2学年					
		挿絵	写真	絵譜	リズム譜	旋律線	色分け	挿絵	写真	絵譜	リズム譜	旋律線	色分け
「音楽を形づくっている要素」との関連													
音楽を特徴づけている要素	音色	○		3									
		×	6	2			2	3	1		3		
	リズム	○	3	1	5					1	6		
		×	3	2			1	9	2				
	速度	○					(1)						
		×	6		1	3	2	2					
	旋律	○	1	4			1	1		6			
		×	7	3			1	10	2				1
	強弱	○					2				1		
		×	8		3	1	1	9		1	1		1
拍の流れ	○	1		7	8		4		4	4			
	×	13	5	1		4	9	3				2	
フレーズ	○			2	1		1			5	1		
	×	9			5	2	9	2	1	3		2	
反復	○											2	
	×						4		1				
問いと答え	○												
	×						4						

は、第1学年同様、単純かつ直接的に情景を表すものが目立ち、「音楽を形づくっている要素」との関連はまったく見られない。

そして〈挿絵〉に次いで多かったのが〈絵譜〉である。第1学年と同じく白抜き音符で旋律や音階を表しているものもあるが、第2学年では少し発展して、楽譜が二線譜で表記される部分もあった。これは学年の発達段階を考慮しながら、少しずつ五線譜に近づくような工夫であるといえる。さらに、白抜き音符で表された〈絵譜〉の他に、旋律を星や人形などの「形」で表している〈絵譜〉が登場している。特に第2学年段階で、鑑賞曲の旋律を階名で捉えるレベルまでは求められないため、このように「旋律」が簡単な形で視覚的に表されているものが多いといえよう。いずれの〈絵譜〉も主に、「音楽を形づくっている要素」の「旋律」や「フレーズ」との関連性が強い。

次に〈リズム譜〉であるが、第1学年のときのような「○(たん)」や「・(うん)」での表現に加えて、四分音符や八分音符、四部休符や八分休符などの音符・休符でリズムが表されるようになった。子どもたちがこれまでよりも複雑なリズムが打てるよう、リズム打ちの際に教師が基本的な拍を提示することが効果的と考えられているのであろう。教師の拍打ちの例も〈リズム譜〉で指導書に記されている。第2学年の〈リズム譜〉は「音楽を形づくっている要素」における「リズム」や「拍の流れ」と関連が強く見られるが、「フレーズ」との関連は希薄である。

最後に〈色分け〉は、「かえるのうた」や「どこかで」など、第2学年から始まる輪唱(カノン)の練習に効果的に用いられている。〈色分け〉がなされていることで、グループで歌う際、自分たちのパートがどのように位置づけられているのかを視覚的に把握することが可能である。さらに〈色分け〉によって、曲の出だし部分がずれていると確実に理解でき、その上、曲が追いかけてこのようになっていることも視覚的にわかる。そこで第2学年の〈色分け〉では、「音楽を形づくっている要素」のうち「反復」や「フレーズ」との関連が強いが、「拍の流れ」や「強弱」との関連はまだ見られないといえよう。

### (3) 第3学年

第3学年の『教科書』では、視覚的教材として〈挿絵〉〈写真〉〈絵譜〉〈リズム譜〉〈色分け〉の5種類のいずれかがほとんどのページで用いられている。低学年と異なる点は、視覚的教材が用いられていない教材が2点あったことである。

まず〈挿絵〉に関しては、低学年と同様に視覚的教材の中で最も多く見られた。この第3学年からリコーダー学習が始まるが、『教科書』では新出の音が出てくるとにリコーダーの運指をわかり易い大きな〈挿絵〉で示している。教師が口頭で「○番目の穴を押さえて」といった指示を出すよりも、〈挿絵〉を参考にして視覚的に理解し、模倣によって演奏する方が、子どもたちには運指や奏法を習得しやすと考えられる。第3学年以降もリコーダー学習は継続されるが、この導入期に基礎的な技能を確実に習得することが重要であり、ここでの指導は〈挿絵〉を有効に活用しているといえる。その他の〈挿絵〉では、低学年と同じように情景を思い浮かべて歌う際の手助けとなるものが多く、〈写真〉に関しても同様である。

次に〈絵譜〉については、第2学年でも見られたように、「旋律」を絵や形で表したものがいくつかあり、これらはいずれも鑑賞活動で効果的に用いられている。〈絵譜〉を見ながら鑑賞することで、「音楽を形づくっている要素」である〈強弱〉や〈旋律〉の動きの理解を促そうとしているので



ある。さらにこの学年で用いられる〈絵譜〉では「旋律」を形で表すだけでなく、「線」で表記しているものが現れてきた。これも前者と同じように「音楽を形づくっている要素」の「旋律」との関わりが深いといえる。

そして〈リズム譜〉は、提示されたリズムをただ打つ活動だけではなく、自分たちでリズムをつくる創作活動で用いられるようになっていた。「強弱」やバランスを工夫したり、合奏の終止形をつくる活動で、つくったリズムを『教科書』に記入できる形式になっている。〈リズム譜〉と「音楽を形づくっている要素」との関連は、「強弱」「リズム」が多いが、「フレーズ」を表しているものは見られなかった。

#### (4) 第4学年

第4学年の『教科書』では、ほとんどのページで視覚的教材として〈挿絵〉〈写真〉〈絵譜〉〈リズム譜〉〈色分け〉のいずれかが用いられており、この第4学年で初めて〈旋律線〉が登場している。また、視覚的教材が用いられていない教材が2点あった。

〈挿絵〉に関しては、第1・2・3学年と同様に、そこから情景を想像せるものが多く見られた。しかしこれまでの第1・2・3学年では、色彩豊かでにぎやかなものであったが、この第4学年からは簡素化し、ワンポイントなどで示されるものが増えている。発達段階に応じて、〈挿絵〉の形態も変化している。

【表4-2】「音楽を形づくっている要素」と視覚的教材の関連性（中学年）

	視覚的教材		第3学年						第4学年					
			挿絵	写真	絵譜	リズム譜	旋律線	色分け	挿絵	写真	絵譜	リズム譜	旋律線	色分け
	「音楽を形づくっている要素」との関連													
音楽を特徴づけている要素	音色	○	(4)	(2)	1				(1)	(2)				
		×	1	3	1	1		1	3	3	2	1		
	リズム	○				3					3	6		1
		×	5	3	1				8	2			1	
	速度	○												
		×	2						3		1	1	1	
	旋律	○			4				(1)		4		1	
		×	13	7		3			12	6	1	4		1
	強弱	○			3						3			
		×	6	4	1	2		1	5	4		2	1	
	音の重なり	○			1						1			
		×	1						4	3	1		1	
	音階	○			1				(1)		1			
		×	1	1					1					
音楽の仕組み	調	○							2		1			
		×												
	拍の流れ	○				1						2		
		×	5	2					2					1
	フレーズ	○			1									
		×	7	2		2			4	1	1	3		1
	反復	○			1									
		×		1					1					
	問いと答え	○			1									
		×		1					1		1			
	変化	○			1									
		×		2					1					

そして〈写真〉については、リコーダー学習を例として取り上げておきたい。この学年でのリコーダー学習は、タンギングに加えてサミングの習得が目指される。サミングの奏法は、教師の手本(範奏)に加えて『教科書』に〈写真〉を掲載することで、確実に習得させる意図が読み取れる。

また第3学年までの〈写真〉は、情景を想像させるものがほとんどであった。しかし第4学年からは、〈写真〉を用いて楽器の特徴を見つけ、そこからどのような音が鳴るのかを想像したり、実際にそれを手本として表現方法を工夫する学習が増加していた。〈写真〉を見ながら音楽鑑賞することで、「この部分はこの楽器が使われているんだ」、「この楽器はこんな音が出るんだ」、などさまざまな発見をしながら、興味をもって鑑賞活動を行うことに効果を期待し用いられていた。この学年での〈写真〉の活用は、「音楽を形づくっている要素」の中では、ある程度「音色」に関連性があると考えられたが、その他の要素との関連性を見いだすことはできなかった。

次に〈絵譜〉であるが、第3学年と同様に鑑賞曲に多用されており、楽器の特徴を生かした“形”や“色”、“線”などで音を表現していた。第3学年では、〈絵譜〉で1つの「旋律」のみが示されていたが、第4学年では「主旋律と副次的な旋律」、「主旋律と伴奏」など2つ以上の異なる旋律を平行して示しているものが出てきている。これは「音楽を形づくっている要素」における「旋律」と「音の重なり」に関連している。

そして〈リズム譜〉は、「リズムアンサンブル」や「リズム伴奏づくり」などの器楽や創作の教材で多く見られた。第4学年では8分の6拍子などの新しい拍子や、多様な音符・休符が組み合わされた複雑なリズムの学習が行われており、そこで〈リズム譜〉は効果的に提示されていた。この学年での〈リズム譜〉の活用は、「リズム」や「拍の流れ」との関連が読み取れた。

この学年で特徴的なことは〈旋律線〉が登場したことである。これまでの学習で「旋律」は、主に〈絵譜〉で視覚的に表現されていたが、第4学年からは「旋律」をシンプルな線で表す〈旋律線〉が多用されるようになってきている。このことから、高学年にむけて〈絵譜〉から楽譜(＝五線譜)に移行させていく指導の意図が見える。ここでの〈旋律線〉は、「音楽を形づくっている要素」での「旋律」と「フレーズ」に直接的関連しているといえる。

#### (5) 第5学年

第5学年の『教科書』では、視覚的教材として〈挿絵〉〈写真〉〈リズム譜〉〈旋律線〉〈色分け〉が用いられており、〈絵譜〉が消えている。第4学年まではほとんどの教材で視覚的教材が用いられていたが、この第5学年からはそれが大幅に減少している。

まず〈挿絵〉に関しては、第4学年と比較して3分の1にまで減少している。また〈挿絵〉は簡素化され、これまでの学年とは異なり、情景を想像させる目的で用いられているものは少ない。〈挿絵〉では、「旋律」を表しているものが見られるが、ほとんどの教材では「音楽を形づくっている要素」との関連はないと判断された。

次に〈写真〉については、第4学年と同様に情景の想像に加えて、〈写真〉から楽器の特徴を捉えたり、演奏形態の確認をする際に用いられている。ここでも「音楽を形づくっている要素」の「音色」と部分的に関連するものが見られた。

そして〈リズム譜〉は、「リズムアンサンブル」や「リズム伴奏づくり」の創作活動で用いられており、「音楽を形づくっている要素」の「リズム」との関連はあるが、「旋律」や「強弱」を表してい



るものはなかった。

〈旋律線〉は2つの旋律の違いに気づいたり、2つの旋律の重なりを感じ取ったりするために用いられている。同時に『教科書』では〈旋律線〉を〈色分け〉しており、これらを活用して複数の旋律を比較する学習場面で生かされている。〈旋律線〉は「音楽を形づくっている要素」のうち「旋律」と「音の重なり」との関連が見いだされる。

上述したように、第5学年では視覚的教材が大幅に減少している。その理由として〈絵譜〉ではなく、五線譜による通常の楽譜が多用されるようになったことがあげられよう。さらに第5学年の学習では、『教科書』の既習ページや巻末ページを複数の題材で共通に用いる指導方法が多くなっており、それゆえに各ページにそれぞれ視覚的教材を掲載する必要なくなってきたことが推察される。

#### (6) 第6学年

第6学年の『教科書』では、視覚的教材として〈挿絵〉〈写真〉〈リズム譜〉〈旋律線〉が用いられている。第5学年と同様に〈絵譜〉が用いられておらず、さらには〈色分け〉も消滅した。そして第5学年と同様に、視覚的教材が用いられていない教材も増えた。

【表4-3】「音楽を形づくっている要素」と視覚的教材の関連性（高学年）

視覚的教材		第5学年						第6学年					
		挿絵	写真	絵譜	リズム譜	旋律線	色分け	挿絵	写真	絵譜	リズム譜	旋律線	色分け
「音楽を形づくっている要素」との関連													
音楽を特徴づけている要素	音色	○	(1)					(3)					
	×	1	4			2	1	5	2		2	1	
	リズム	○			2						2		
	×	2	4					2	3			1	
	速度	○											
	×				1			1	2			1	
	旋律	○	2			2	1					1	
	×	4	5		2			4	8		2		
	強弱	○											
	×	2	3		2	2	1	2	3		1	1	
	音の重なり	○	1			2	1						
	×	1	3					5	4		2	1	
	和声の響き	○											
	×		1					4	1				
音楽の仕組み	音階	○		1									
	×			2									
	調	○											
	×												
	拍の流れ	○											
	×												
	フレーズ	○											
	×			2					1				
	反復	○											
	×	1											
	問いと答え	○											
	×												
	変化	○											
	×	1	2		1	1			1				
	音楽の縦と横の関係	○											
	×												

まず<挿絵>について、用いられていた数は第5学年とほぼ同数である。また、情景を想像させるような目的ではなく、楽譜だけのシンプルなページにワンポイントとして控えめに飾られている。<挿絵>に関しては、「音楽を形づくっている要素」との関連は見られない。

次の<写真>であるが、第5学年と同様に楽器の特徴や演奏している人々の様子を理解するために、音楽鑑賞の参考として用いられているものがほとんどであった。これは音楽鑑賞の学習において、子どもたちに鑑賞の具体的なポイントを与えてくれている。<写真>は、「音楽を形づくっている要素」とは、「音色」において部分的に関連している程度にとどまっているといえる。

そして<リズム譜>では、「リズムアンサンブル」と「リズム伴奏づくり」の創作活動のみで見られた。高学年ではこれまでの学習の成果から、多くの音楽学習場面で<リズム譜>による補助が不要になるであろうという想定が読み取れる。「音楽を形づくっている要素」との関連は「リズム」のみであるといえる。

最後に<旋律線>である。これは楽譜の主旋律を明確にするために旋律を線で部分的に取り出して、「旋律」の特徴や変化を視覚的に捉える活動が展開されている。「音楽を形づくっている要素」とは「旋律」のみの関連と判断される。

第6学年での視覚的教材は、<挿絵>や<写真>が簡素化されるなど、ほとんどの学習活動の参考程度に用いられていた。

#### 4. 視覚的教材の種類ごとの分析と考察

次に、視覚的教材の種類ごとに分析結果の考察を行う。

##### (1) <挿絵>

<挿絵>は、全学年を通じて最も多く用いられていた。そして、第1学年から第6学年にかけて2学年ずつまとまって減少している。低学年では『教科書』の1ページの半分が<挿絵>であったり、見開きで2ページ全面に<挿絵>が記されている教材も多かった。そこで期待されている効果は、子どもたちが楽しく歌ったり、情景を想像することが中心である。反対に、高学年では『教科書』の大半を楽譜が占めており、簡素化された<挿絵>がワンポイントで掲載されているだけであった。これは高学年にもなると、曲名や歌詞などから情景を想像することができるからであろう。

<挿絵>は、全学年を通して「音楽を形づくっている要素」との関連はほとんど見られない。しかし、第1学年の「げんこつやまのたぬきさん」のように、身振り例が掲載されているものもあり、実際に<挿絵>を見て踊ることで、「リズム」や「拍の流れ」を感じとることは効果があると考えられる。

##### (2) <写真>

<写真>は、全学年を通して数的には大幅な変化は見られない。そして内容としては、全学年において情景を映しているものが多い。特に共通教材では、全24曲中、20曲に視覚的教材が用いられており、そのうち17曲が<写真>であった。共通教材は、ほとんどが明治期から大正期に創られた文部省唱歌であり、古い日本の風情や情緒を表現しているものが多い。そこで、古い日本の風景を残している場所の<写真>を用いて、現代の子どもたちに楽曲が表現している内容や心情を想像させるために用いられていると考えられた。

また高学年では、〈写真〉を用いて様々な楽器やオーケストラの演奏形態の特徴を見つけ、そこからどのような音が鳴るのかを想像したり、実際にそれを手本として表現方法を工夫する学習が展開されていた。特に〈写真〉は鑑賞活動で多用されており、「音楽を形づくっている要素」の「音色」との関係が部分的に見られると判断された。

### (3) 〈絵譜〉

〈絵譜〉が『教科書』に掲載されている数は、第1学年から第4学年まではわずかな増減が見られ、第5学年以降は減少している。〈絵譜〉には、他の視覚的教材の種類とは異なり、次のような特徴的な点が見られた。

まず低学年の〈絵譜〉では、「白抜き音符」で音が示されており、第1学年から第2学年の途中までは、歌唱や器楽の活動で五線譜が用いられておらず、線無しで表現しているものも多く、あっても二線譜までである。これらの「白抜き音符」の〈絵譜〉によって、「旋律」の上行・下行や拍節感が感じ取れるように工夫がなされていた。そこで「音楽を形づくっている要素」では「旋律」「拍の流れ」との関連が強かった。

そして、鑑賞教材で用いられる〈絵譜〉では、「旋律」の上行・下行や、曲想の「変化」などを音符ではなく様々な大きさの“形”やカラフルな“色”、太さの異なる“線”で表されていた。鑑賞活動では、このようなく絵譜による視覚的教材によって、「旋律」や「拍の流れ」、「強弱」を感じ取る（聴取する）ことができ、「変化」や「反復」といった「音楽を形づくっている要素」を、より明確に理解することができるように示されていた。

### (4) 〈リズム譜〉

〈リズム譜〉は、第1学年から第4学年まで用いられていたが、第5学年以降は見られない。第1学年では「○（たん）」や「・（うん）」で表記していたが、第2学年の途中からは実際の音符や休符となる。このように発達段階を考慮した丁寧な指導がこの〈リズム譜〉から見て取れた。

また第4学年以降は、ワークシートに自分たちがつくった「リズム」を記す学習も展開されており、実際の音を〈リズム譜〉に変換することで、子どもが自ら「リズム」を視覚的に把握するような場面も見られた。

### (5) 〈旋律線〉

〈旋律線〉は、中学年まで多用されていた〈絵譜〉や〈リズム譜〉を洗練したものと考えられ、第4学年の途中から単純な“線”で「旋律」の動きや「音の重なり」を表していた。しかし、この〈旋律線〉を用いた教材は少数である。これは第4学年以降から増加する楽譜によって、その楽曲を視覚的に捉えることが意図されていると推察される。

### (6) 〈色分け〉

最後に〈色分け〉であるが、これは全学年を通して少ない。しかし〈色分け〉は、特に「輪唱（カノン）」の学習の際、大きな役割を果たしていた。「音楽を形づくっている要素」では主に「反復」と「変化」との関連が見られた。

## 5. まとめ：「音楽を形づくっている要素」と視覚的教材

本論文では、「音楽を形づくっている要素」に関する指導法を構造化するための基礎研究として、視覚的教材との関連で検討を行った。そしてこれらの関連性について、多くの特徴を見いだすことができたが、それと同時に「音楽を形づくっている要素」には、視覚的教材では表現できない要素や、十分に読み取ることでできない要素があることを指摘する結果ともなったといえる。

例えば「速度」である。これは絵や線などで表すことは困難であり、ほとんどの視覚的教材に見られなかった。また、第3学年以降の「調」や「音階」の要素についても少なかった。「調」を視覚的教材で表現することは困難であろうが、「音階」は教師の工夫によって視覚的教材を開発することができるのではなかろうか。

さらには高学年の「反復」や「問いと答え」、「変化」、「音楽の縦と横の関係」も視覚的教材には反映されていなかった。高学年にもなると視覚的に捉えなくとも、聴覚だけでこれらの要素を把握・理解できると想定されているのであろうか。しかし、これらの要素こそ視覚と聴覚の双方（もしくは他の感覚も用いて）によって学習する方が、より子どもに大きな学習効果をもたらすと考えられる。そこで、高学年における「反復」や「問いと答え」、「変化」、「音楽の縦と横の関係」を視覚的に表現する教材の開発し、それを用いた指導法を考案することが必要とされよう。特に、「音楽の縦と横の関係」を学習するための教材開発および指導法の考案は、重要な課題であると思われる。

「音楽を形づくっている要素」に関する指導を行う教師が、本論文で指摘した視覚的教材との関連の特徴を相対的に把握することによって、より効果的な授業を創造することができると考えられる。そしてこれらの活用は、「音楽を形づくっている要素」に関する実践の授業研究サイクルを形成することに寄与するであろう。

最後に、本論文では関連性に関する特徴抽出のレベルにとどまっている。今後はこれらを用いて、さらに具体的な指導法の構造化を試みることを課題としたい。

### 注

- 1) 国立教育政策研究所のHPでは、教育情報共有ポータルサイトを開設しており、全国から教育実践の実例を蓄積している。このサイトは2013年10月ごろから実質的な運営が開始されているが、2016年10月時点で小学校音楽科の実践報告は375件あり、その内334件は学習指導案の具体的なレベルで登録されている。これらを概観すると、ほとんどの学習指導案の中に「共通事項」や「音楽を形づくっている要素」に関連する記述がなされており、実践現場においてこれらが主要な研究課題となっていることがわかる。

### 【引用・参考文献】

#### 〈著書〉

- 池田忍(2010)『視覚表象と音楽』明石書店  
小島律子(2011)『子どもが活動する楽しい鑑賞授業 音楽を聴いて図形で表現してみよう』音楽之友社  
斉藤孝(2002)『「五感力」を育てる』中央公論新社  
高倉弘光(2012)『子どもがときめく音楽授業づくり：[共通教材]が見える』東洋館出版社  
高宮真一郎 他(2014)『視聴覚融合の科学』コロナ社  
箱田裕司編著(1991)『イメージング表象・創造・技術-』サイエンス社

# 〈論文〉

- 伊野義博、清水宏美、谷正人、他(2010)「ラウンドテーブル 多様な音楽における認識法の違いをどう伝えるかー「共通事項」の「音楽を形づくっている要素」との関係において」(「日本音楽教育学会」第41回大会報告)『音楽教育学』(40-2)、日本音楽教育学会、pp.69-74
- 大平和子(2012)「音楽科〔共通教材〕に着目して教材研究をすることで、指導のポイントが見えてきた(特集 授業改善に向けた教材研究の工夫)」『初等教育資料』(899)、東洋館出版社、pp.35-38
- 小笠原真也(2011)「小学校音楽科における鑑賞教材への効果的アプローチ」『京都教育大学紀要』(119)、京都教育大学、pp.169-177
- 河邊昭子(2015)「小学校音楽科における〔共通事項〕に関する研究:『教育音楽小学版』にみる実践内容を中心に(初等教育)」『教育学研究紀要』(61-2)、中国四国教育学会、pp.500-505
- 小島千か(2013)「音楽鑑賞授業における音楽の要素や構造を把握させる指導に関する調査」『山梨大学教育人間科学部紀要』(15-22)、山梨大学、pp.317-328
- 佐藤康子(2011)「音楽鑑賞を核とした活動で児童がより思考・判断する姿を目指してー〔共通事項〕に着目させることで、授業の活性化を図る」『教育実践研究』(21)、上越教育大学学校教育実践センター、pp.143-148
- 西條友香(2009)「共通事項を扱った音楽学習の実践事例:『といとこたえをかんじてわらべうたをうたおう』の実践を通して」『学習研究』(437)、奈良女子大学、pp.36-41
- 新山王政和、滝藤友美(2010)「音楽の諸要素と向き合わせることをめざした新しい視点からの学習指導案モデルの開発ー小学校学習指導要領(音楽)の「共通事項」に対応したモデル案作成の試みー」『愛知教育大学研究報告 芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編』(59)、愛知教育大学、pp.1-10
- 菅裕 他(2013)「音楽科における小中一貫教育に関する研究(2):〔共通事項〕の取り扱いを中心として」『宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要』(21)、宮崎大学、pp.107-116
- 竹井成美 他(2012)「音楽科における小中一貫教育に関する研究(1):〔共通事項〕の取り扱いを中心として」『宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要』(20)、宮崎大学、pp.59-69
- 館雅之(2009)「曲想の工夫は〔共通事項〕を手がかりにー一人一人が音楽を『感じ取る活動』を基盤に(特集 新教育課程のねらいの実現に向けてー魅力ある教育計画の立案(2) 魅力ある小学校教育の展開)ー(音楽科における魅力ある教育計画の立案)」『初等教育資料』(848)、東洋館出版、pp.34-37
- 田中陽治(2009)「学習指導要領への音楽『共通事項』の位置付けについて」『岐阜女子大学文化情報研究』(10-6)、岐阜女子大学、pp.49-55
- 時得紀子、小林田鶴子、内海昭彦(2011)「ITCを活用した音楽学習の一考察:初等教育段階への実践を通して」『上越教育大学研究紀要』(30)、上越教育大学、pp.265-274
- 時得紀子 他(2012)「音楽科における〔共通事項〕活用についての一考察:小学校現職教員への意識調査を通して」『上越教育大学研究紀要』(31)、上越教育大学、pp.363-372
- 松本伸乃助、藤井浩基(2011)「小学校音楽科における金管楽器の音色と音の出るしぐみを題材とした授業実践の試み」『鳥根大学教育臨床総合研究』(10)、鳥根大学、pp.93-106
- 松本徹、津田正之、谷本修(2009)「2008年改訂学習指導要領・音楽に対する教師の意識(1):小学校における〔共通事項〕を中心として」『学校教育実践学研究』(15)、広島大学大学院教育学研究科、pp.219-228
- 松本菜摘、河添達也(2015)「小学校音楽科における『教育プロジェクト型アウトリーチ』の授業開発研究」『鳥根大学教育臨床総合研究』(14)、鳥根大学教育学部教育臨床総合研究センター、pp.181-190